

# 四国ユースフォーラム

～ワカシ宿から四国発進～

参加者は、講演や意見交換会、他団体の活動発表、さまざまな交流行事を通して、その絆をより強くし、自分たちの地域での活動を考え直すきっかけとすることができました。また、他の参加者の前で今後の決意表明をすることで、自分を信じて行動をおこしていく勇気を持ちました。

## 1. 事業実施までの経緯

本事業は、青年の育成という青少年交流の家（旧青年の家）の原点に立ち戻った事業である。

地域を元気づける上で、青年活動の活性化は必要不可欠である。しかし、従来の地域における青年活動の中核を担っていた青年団員数は減少し、その役割も変化してきている。四国各県では、青年団だけでなく、NPO法人や大学のサークルなど、地域おこしや地域文化継承において特徴ある活動をし、地域に貢献している若者もいるが、その若者同士の連携はあまり強くないのが現状である。このような状況において「四国はひとつ」のテーマのもと、地域の活性化のために日頃活動している四国の青年が集まることで、その絆を強くし、四国を担うリーダーを養成していくことが国立施設として取り組むべき課題である。

四国の中核的施設として我がふるさと四国を仲間と一緒に元気づけたい、そんな若者を育てていきたいと四国各県の青年団と連携して事業を展開してきた。平成18年度に始まった本事業は、1年目は高知県青年団協議会、2年目は愛媛県青年団連合会と連携して事業を実施してきた。3年目の昨年は、担当県であった香川県連合青年会に加え、大学生を中心とした事業「プロジェクトY(ユース)」を展開していた香川県教育委員会と連携し事業を作り上げた。

4年目となる今年は、担当県である徳島県青年連合会と打ち合わせを重ね、効果的なプログラムについて共に考えた。その際、他の三県青年団とも連絡を密にしながら準備を進めていった。また、青年教育の担当者に事業評価及び運営に関する助言者を依頼するなど、四国四県の教育委員会とも連携しながら事業を進めた。

## 2. ねらい

地域社会で果たすべき青年団体の役割が、商業サービスの充実や行政が担う分野の拡大等の理由により変化してきている中、四国全県の青年が集い、日頃の活動や地域への思いを語り合う機会を持つことで、今後の活動の活性化につなげるとともに、交流をとおして青年団体相互の連携強化を図る。

- |         |   |
|---------|---|
| 3. 主催   | 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家                     |
| 4. 共催   | 四国青年団協議会・徳島県青年連合会・香川県連合青年会<br>愛媛県青年団連合会・高知県青年団協議会 |
| 5. 後援   | 徳島・香川・愛媛・高知各県教育委員会・大洲市教育委員会                       |
| 6. 期日   | 平成22年2月6日（土）～7日（日）〈1泊2日〉                          |
| 7. 場所   | 国立大洲青少年交流の家                                       |
| 8. 参加人数 | 参加者四国に住む18歳以上39歳以下の青年33名（募集人数40名）                 |
| 9. 講師   | 江上光治氏（徳島県立池田高等学校野球部元主将）<br>矢部拓也氏（徳島大学総合科学部准教授）    |

那賀町青年団・四国青年NGO HOPE・土佐清水市連合青年団  
香川大学野外活動部・YGP（八幡浜元気プロジェクト）  
鳴門教育大学BBS会

## 10. 日 程

【2月6日（土）】

13:00 13:30 14:00 15:00 16:30 18:00 19:00 20:00 21:00 22:30

受付	開講式	アイスブレイク	スポーツ交流	講演 江上光治氏 「信じる力」	夕食・休憩	入浴	レクリエーション 「阿波踊り」 で交流を深めよう！	情報交換会	就寝
----	-----	---------	--------	-----------------------	-------	----	---------------------------------	-------	----

【2月7日（日）】

6:30 7:30 8:45 11:45 14:00 15:30 15:40 16:30

起朝のついで 床い掃	朝食	四国四県からの“発信”	意見交換会 昼食	意見発表会 (決意表明)	ふりかえり 閉講式	評価会
---------------	----	-------------	-------------	-----------------	--------------	-----

## 11. 活動内容

【第1日 2月6日（土）】

「アイスブレイク」(14:00～15:00)

新しい仲間との交流を図るため、徳島県青年連合会の運営でレクリエーションを行った。各自が好きな食べ物を紙に書き、出会った相手に質問をして、相手の好きな食べ物を当てるというものであった。レクリエーションを続けるうちに、次第に参加者の表情も和らぎ、参加者相互の交流を十分に図ることができた。



「スポーツ交流」(15:00～16:30)

アイスブレイクに引き続き、更なる交流を図ることを目的に、スポーツ交流を行った。参加者が多かった徳島県チームと香川・愛媛・高知県の連合チームとの対抗戦を実施した。綱引きや長縄跳び、キャッチ・ザ・スティックなどを行った。スポーツを通じてチームのメンバーとコミュニケーションを取り合ったことで、参加者相互の距離が更に縮まった。



「講演～信じる力～」 江上光治氏 (16:30～18:00)

「やまびこ打線」で有名な徳島県立池田高等学校の主力選手として甲子園夏春連覇(昭和57・58年)を成し遂げ、主将も務めた江上光治氏が講演を行った。徳島に帰郷してからは、「故郷のために恩返しをしたい」との思いで、各地で精力的にボランティアの講演会を開いている江上氏から、故郷

に対する熱い思いなどを学びとることをねらいとして実施した。

華やかな野球歴を持っている江上氏だが、決して最初から才能に恵まれた野球選手ではなかったこと、それでも高校1年の時からレギュラー格に抜擢してくれた蔦監督の期待に応えるために寮で毎日欠かさず深夜まで自主練習を続けたこと、その姿がチームメイトを刺激し、有名な「やまびこ打線」の基礎となったことなどを語った。

江上氏は、目標があっても何をすればよいのか分からない時、まずやることを決めて、それをずっと継続しやり遂げることができれば、目標は必ず達成できるという「信じる力」を持ち続けて欲しい、と熱く参加者に語った。

参加者は江上氏の力強く、心に響く講演に聴き入っていた。そして、これを機に自分たちの地域のために何か新しいことにチャレンジしてみようとする勇気を持つことができた。



### 「レクリエーション「阿波踊り」で交流を深めよう！」(20:00~21:00)

担当県である徳島県青年連合会の地域特性を生かしたプログラムとして、阿波踊りを行い、交流を深めた。「人間知恵の輪」で緊張をほぐした後、徳島県青年連合会の指導のもと、グループをつくり、男踊り、女踊りを練習した。その後、全員で輪になって踊った。参加者は、自分たちの地域の特性を意識するとともに、一緒に独特の速いテンポの踊りを楽しむことで、一体感を持つことができた様子であった。



### 「情報交換会」(21:00~)

1日目の最後の時間は、リラックスした時間を過ごした。自分たちの活動のことや青年団体の将来のこと、今後の「四国ユースフォーラム」のあり方についてなど、自由に情報交換をした。自分たちが日頃考えていることを本音で語り合える貴重な時間となった。



## 【第2日 2月7日(日)】

### 「四国四県からの“発信”」(8:45~11:45)

四国四県から6つの青年団体による地域での取り組みの発表が行われた。この時間は、他の青年団体の各地域での活動について知ること、刺激し合うことをねらいとして実施した。このプログラムは、各青年団体が発表した後、コメンテーターが参加者に気づいてもらいたい視点などをコメントし、最後に質疑応答を行うという形式で進められた。コメンテーターは徳島県教育委員会生涯学習政策課小笠健二氏、香川県教育委員会生涯学習・文化財課田嶋康氏、愛媛県教育委員会生涯学習課田井通臣氏が務めた。

最初に、那賀町青年団からは「愛する地元の為に僕らが出来る事ー那賀町青年団の活動についてー」と題して、人形浄瑠璃の『丹生谷清流座』と吹筒花火の煙火組『相生龍青團』の取り組みについて発表があった。郷土の伝統芸能に若者が熱心に取り組んだことで、年配者の煙火組が復活するなど、地域に大きな影響を与えているとの報告があった。

次に、四国青年NGO HOPEからは「四国のHOPE～青年から四国を!!～」と題して、自分たちの組織や事業についての発表があった。四国の青年の現状を分析し、それを改善するための手法を明確に示した。「四国を活性化したい」との思いを強く感じられる発表であった。

続いて、土佐清水市連合青年団からは「土佐清水市連合青年団・出張サンタ」と題して、子どもにサンタの格好をしてプレゼントを配るという、10年以上地元で根付いている事業についての発表があった。苦労が多い青年団活動の中で、子どもに夢を与える事業を続ける意義について伝えた。

次に、香川大学野外活動部からは「香川大学野外活動部」と題した、部内の主な活動についての紹介があった。部の活動を自ら主体的に行っている様子がよく伝わる発表であった。

続いて、YGP（八幡浜元気プロジェクト）からは「八幡浜を元気にするプロジェクト～人の元気をまちの元気につなげる～」と題する報告が行われた。高校の生徒会が母体となって発足したYGPが、多様なプロジェクトを組み、それぞれの活動を楽しみながら活動している様子が紹介された。

最後に、鳴門教育大学BBS会からは「鳴門教育大学BBS会の活動」と題し、保護観察所と連携したスポーツ交流会などの紹介があった。活動の幅を広げるべく、高齢者や青年団との連携に務めているとの報告があった。

発表終了後、全体指導者の徳島大学総合科学部矢部拓也准教授より「質の高い発表だった」とのコメントがあった。そして、発表のあった6団体の活動の位置づけについて、座標軸を用いた説明があった。また、前日の江上氏の講演で自分を信じ、行動に移すことの大切さを学んだ参加者に対し、午後の意見交換会後に「地域を元気にするための目標を個々が立て、一人ひとり発表しよう。」との呼びかけがあった。

参加者は、各団体の発表を聞いて大いに刺激を受けた。また、矢部准教授の説明から、自分たちの活動の立ち位置についての整理ができたようであった。



### 「意見交換会」(11:45～14:00)

日頃の自分たちの活動における成果や問題点について意見を交換し、今後の活動に生かすことを目的に意見交換会を行った。多様な団体のメンバーで構成する5～6人のグループで話し合い、途中で昼食として四国四県の特産品の食材が入った鍋料理を食べた。それぞれ今後の活動目標を立てる参考になったようであった。



### 「意見発表会（決意表明）」（14：00～15：30）

午前の矢部准教授の呼びかけを受け、地域を元気にするための活動目標を個々が立て、参加者の前で決意表明することになった。これは、その成果や課題を次回に集まったときに報告し合い、更なる活動の活性化につなげたいというねらいから実施した。

参加者からは、「青年団員を増やしたい」や「必ず年に1度は他の団体と連携したい」などの力強い決意表明があった。若者達の「信じる力」を持ち続け、自分たちの目標を達成するという強い気持ちを感じる時間であった。



### 「評価会」（15：40～16：30）

関係者の意見を反映させ、今後の事業に生かすために、矢部准教授や四国四県青年団の役員、コメンテーターを務めた徳島・香川・愛媛県教育委員会の担当者、国立大洲青少年交流の家のスタッフが集まり、評価会を実施した。評価会は、事業評価及び運営に関する助言を依頼した三県教育委員会の担当者が記入した事業評価用紙をもとに行った。この中で、本事業について「青年活動に刺激と活力をあたえられる場の設定は必要であり、このようなフォーラムの持つ意義は大きいと思う」などの評価をもらった。

これらの評価を受け、4回目を終え、これで一段落する予定であった本事業は、参加者の強い要望もあって、来年度以降も継続して実施していくことになった。

## 12. 参加者の声

参加者の事後アンケート結果

満足58% やや満足42% やや不満0% 不満0%

- つながり大切に2日間でした。
- 同じ仲間、素晴らしい教授にめぐりあえてよかった。スタッフに感謝したい。
- 来て本当によかったです。自分の悩みを明確に整理できました。あとは実行に移します。
- とてもよい刺激を受けることができ、自分の今後の生活・活動に役立てることのよい機会であった。

## 13. 成 果

### ①多様な参加者（参加団体）があったこと

今年度は、長く地域に根ざした活動をしている青年団だけでなく、地域で子どもや老人に対し、ボランティアを積極的に行っている大学生等に、広く広報を実施した。その結果、四国各県から大学生11名を含む計33名の若者の参加があった。大学生以外にも青年団には属さず、地域のために活動している社会人の参加があった。昨年度から継続して実施した「青年団以外の若者の参加を増やし、若者同士のさらなる交流を図る」という目的は、達成されたと考えている。

### ②交流をとおした青年団体の連携強化

本事業では、1日目に交流を深め、その絆を強くすることを目的にしたプログラムを配置した。県対抗で争うスポーツ交流や担当県である徳島県青年連合会による名物「阿波踊り」を楽しむレクリエーション等がこれに該当する。参加者はその大半が初対面であったが、これらのプログラムや集団での宿泊体験をとおして、打ち解け合い、様々なことを話し合える雰囲気できた。このことは、今後、青年団体の活動の輪を広げるきっかけとなったと思う。

#### ③今後の活動活性化のきっかけづくり

2日目午前の「四国四県からの“発信”」では、6つの団体が、日頃の地域での自分たちの活動について発表した。午後の意見交換会では、午前の発表を受け、グループ毎に日頃の自分たちの活動について語り合った。参加者は、自分たちと異なる年齢、立場の人々の活動を知り、その思いを聞く中で、大きな刺激を受けている様子であった。意見発表会では、各個人がこれからの目標を立て、それを参加者全員の前で発表した。この意見発表会は、事業評価及び運営に関する助言者からも「1人ずつ決意を発表したことが、今後の行動の動機付けとなる」という評価をいただいた。

#### ④四国四県青年団の組織内の活性化

これは過去3回も含めた成果であるが、この4年間で四国各県青年団がそれぞれ担当県を1回ずつ経験した。事業後、担当県を経験し、仲間と協力して事業を作り上げたことにより、これまで以上に青年団活動に積極的に関わるようになった役員がいるとの声があった。これも大きな成果だと考える。

## 14. 課 題

### ①魅力的なプログラム作り

今回の事業で最も頭を悩ませたのがプログラム内容の検討であった。試行錯誤しながらプログラムを構成してみたが、結果的に青年団体にとって最適なプログラムであったのか疑問が残っている。来年度以降は、四国青年団協議会をはじめとした関係団体との連絡を今まで以上に密にし、そのニーズを十分に把握した上で、プログラムを組むようにしたい。また、本事業を若者のリーダー養成の事業とするのか、更なる活動の輪の広がりを目指す事業とするのかなど、社会の要請と青年の現状を踏まえ、事業の主軸を明らかにすることもプログラム構成をする上で、大切だと考えている。

### ②多数の参加者を募ること

成果でも述べたように、今回は11名の大学生を始めとした、多様な団体からの参加があった。しかし、参加者は33名とやや少ない結果となった。来年度は、参加者を増やせるようにしたい。具体的には、今回の事業報告書を兼ねたリーフレットを関係諸機関に配布し、広く普及を図りたいと考えている。また、四国青年団協議会や四国四県青年団、四国四県教育委員会等の青年教育に関わる団体との連携を更に深めていくことが必要である。そして、これまでに参加が少なかった四国各県の地域青年団にも積極的に広報していくことも有効な手段だと考える。

今後の活動目標を発表しあった意見発表会において、ある参加者が次のような宣言をした。

「来年は高知に参加者を100人集めよう！」

上記のような青年の活動や自分が生活している地域を想う熱い心を大切にしたい。国立大洲青少年交流の家は、「国立大洲青年の家」として昭和49年に開所した。再度、「青年の育成」という原点に立ち戻り、若者を元気づけられる魅力的な事業を今後も展開していきたい。